春風秋霜

江利川毅　県立大理事長

学習と学修

実践し解決する力

大学での学びを「学習」ではなく「学修」という。

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（中央教育審議会答申＝2012年8月）の中の脚注に「大学設置基準上、大学での学びは『学修』としている。これは大学での学びの本質は講義、演習、実験、実習、実技などの授業時間とともに授業のための事前の準備、事後の展開などの主体的な学びに要する時間を内在した『単位制』により形成されていることによる」と書かれている。

大学設置基準第21条には「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して…」と規定されている。単位を取るには、大学の授業時間に学ぶだけでは不十分で、主体的な予習復習などを含め45時間の学びをして初めて1単位が取れるのである。

1科目が2単位なので、90時間の学修が必要となる。私が学生時代に、90時間と授業時間の差分を主体的に予習復習していたか、恥ずかしながらノーである。現在の基準は学生に相当の頑張りを求めている。

■自覚と主体性

学習も学修も広辞苑（初版）に載っているので、古くからある言葉なのだろう。「学修」は「まなびおさめること」。「学習」は「①まなびならうこと②広義には精神・身体の後天的発達を言い、狭義には過去の経験の上に立って新しい知識や技術を習得すること③曽（かつ）て遭遇し、或（ある）いは未（いま）だ遭遇しない状態に適応する能力を習得する過程」。

大学での学びを「学修」という言葉に統一したのは、前出の中教審答申からのようである。高校までの勉強と異なり、大学生としての自覚を持って主体的に学ぶことを強調しているのであろう。その意図は分かる。しかし、「学習」にも深い意味がある。

少し横道にそれる。「五十歩百歩」という言葉がある。中学校の授業で「似たり寄ったり」と説明されたが、私は倍も違うではないかとその説明に疑問を持った。この意味は、言葉の出典を知らなければ分からない。中国の古典の一つ『孟子』に出てくる話である。「戦いが始まったときに鎧（よろい）や武器を捨てて逃げだした者がいる。百歩逃げた者もあれば、50歩逃げて止まった者もいる。50歩逃げた者が百歩逃げた者を臆病者と笑ったら、いかがですか」という孟子の問いに、「それはいかん。ただ百歩逃げなかっただけで、逃げたことには変わりはない」と王は答える。この話から「五十歩百歩」は「わずかな違いだけで、本質的には変わりがないことのたとえ」として使われている。

■習うは命懸け

「学習」という言葉にも出典がある。『論語』の冒頭の「学びて時に之（これ）を習う。亦（また）説（よろこ）ばしからずや」である。「説」は悦と同じで、心の中のわだかまりが抜け落ち、心の底から喜ぶという意味である。

「習う」はひな鳥が親鳥の飛ぶのをまねて自分の翼を動かしている様を字にしたものである。繰り返して修め行う、教えられて自分の身につける、という意味である。飛べるようになったらひな鳥は死んでしまうのだから、習うは生半可なことではない。私は、習うは命懸けでしっかりと身につけることと受け止めている。では、時に之を習うと、なぜ心の底から喜ばしいとなるのだろうか。

私は埼玉医科大学の特任教授もしており、1年生に以下のような話をする。「大学で医学の知識を学ぶ。実習で医術を学ぶ。先生の技術をよく見て練習して自分のものとしてしっかりと身につける。そして習得した医術を自分が実施して、患者の病気を治す、人を助けることができる。そのとき、心の底から嬉（うれ）しいと思うだろう。それが『学んで時に之を習う。亦た説ばしからずや』の意味である。学んだことを身につけ実践して問題を解決する、それが真の学習である」。

学ぶからには、問題解決力、実践力をしっかりと身につけるまで学び切る。そのことを肝に銘じていただきたいと思うのである。

（次回は23日付）